第56号　50円
昭和53年9月25日

内　容

大学の国際化……1
国際セミナー館の落成を祝う……2
第37回理事会・第22回評議員会…3
国際学生シンポジウム……4〜6
国際セミナー館落成記念特集 7〜10
昭和53年度共同セミナー委員会…11
第6回八大学合同セミナー……11
昭和52年度共同セミナー白書……12
昭和52年度業務白書……13
館長日記から 15　事業部だより 14

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
〈所在地〉
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話 0426-76-8511〜3
振替口座 東京 74590番
〈東京事務所〉
東京都中央区日本橋本町3—3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京 (241) 3961
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

大学の国際化

国際セミナー館落成記念講演から

東京大学総長　向坊　隆

私は、大学は本来国際的なものであると考えておりましたので、国際化という言葉に多少の戸惑いがありますが、最近はいろいろなところで、高等教育の国際化、留学生問題、あるいは国際交流といったことが論じられており、わが国の大きな関心事になっていると申すことができると思います。

大学の国際化とは、第一に外国人の教授、学生を受け入れ、国際的に開かれたものにする、第二に大学間における国際交流、国際協力を盛んにする、という二点を意味していると考えます。明治初期に発足したわが国のいわゆる近代的な大学は、外国の進んだ知識を導入するという意味では、外国に開かれた大学でありました。当時の高等教育の予算の約一五%が、外国人の招へいに使われていたということです。

それでは、最近になって、なぜ国際化がこれほどまでに問題とされるようになったかというと、一つには学問は本来普遍的なものであり、大部分の学問分野は国際的な協力の下に、あるいは視野の下に進められるべきである、という学問の本質的な理由によるものであります。第二には、わが国の将来を見通した場合、欧米先進国ばかりでなく開発途上国との国際協力なしには、今後の日本の生きる道はない、という国家なり社会の要請が強くなっていることも疑いのない事実であろうと思います。

そして第三には、情報化社会と呼ばれるものと関連していることですが、通信・運搬技術の発達により、日本にいながら世界の情勢が容易にわかるようになるにつれて、逆に外国との交流の必要性も増してきているということであります。

しかしながら、わが国の大学はこのような状況に十分に対応できていないのが実情であります。例えば外国人留学生にしても、東大には現在、約五〇〇人の留学生がおり、他の大学と比べて多い方でありますが、全学生数に対してわずか二・五%です。さらに外国人の先生の数は、特定の大学を除いて、きわめて少ない。特に国立大学では、正規の教授・助教授のポストに外国人がつくことができない。現在、これを認める法案を国会に提出すべく準備中だそうですが、なお、人事その他の重要事項について評議会における議決権を与えない、という条件がついています。加えて、われわれ日本人は、国際人としての活動が不十分であり、国際会議に出ても語学の不足はもとより、会議の雰囲気にも慣れておらず、すぐに対応できないことが多いのです。

しかしまた、不十分ながら国際化の方向に向かって進んでいることも事実です。確かに、誰がどこで何を研究しているかを相互に知っているアメリカとヨーロッパ、あるいはヨーロッパ相互の交流と比較すれば、地理的な不便さはいまだに残っていますが、学問の交流という面での国際化は、日本は盛んな方だと思います。一つは化学、物理、経済学といった既存の学問分野においては、研究者相互の交流はもともと非常に活発です。また、比較文化や国際関係のように、本来国際的たらざるをえない学問分野もあります。自然科学の方でも、非常に大きな装置を必要とする研究、例えば基礎物理では加速機を作るのに一台何百億ものお金がかかりますが、このような分野では、共同利用による研究が進められています。環境問題のように人類の生存にかかわる国際的に共通の研究もあります。

もう一つ、重要であるけれども十分に開かれていない分野が開発途上国との協力であります。私の専門であります自然科学や技術の分野では、技術移転と申しまして開発途上国に対する協力が行われているわけですが、日本で発展した技術が必ずしもそれらの国々で役に立つとは限らないという問題があります。技術の発展には省力化という大きな方向があるわけですが、開発途上国の目標の一つは雇用の増大である、ということは、その一つの例です。私も若い人たちと研究グループを作ってこの発展途上国との協力に関する研究に取り組んでいますが、始めてみると、これは膨大な研究分野であることがわかります。第一に、一口に発展途上国といっても、どのようなカテゴリーに分けて協力を考えていかなければならないか、というテーマだけでも五、六人で二年間かかります。そして分類した国に対して、どのような形で協力すべきかということになると、まだ手がつけられない状態です。

日本ばかりでなく、今までの国際化というのは、先進国同士の間では非常にうまく進んでいますが、先進国と開発途上国との関係は極端にいえば植民地政策の一環として行われてきたのであって、今後は対等な関係において、人類全体のために国際協力はどうあるべきかを真剣に考えていかねばならないと思います。（文責・編集者）

●開館十周年記念事業――その三

国際セミナー館の落成を祝う

式典を飾った向坊・岩佐両氏の記念講演

二つの国際プログラムで開幕する

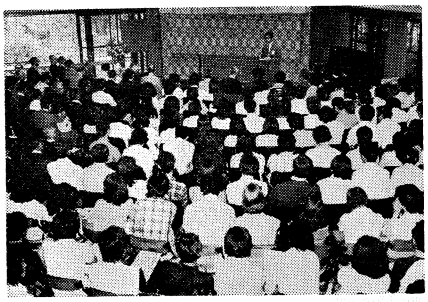
①落成記念国際学生シンポジウム
②八大学合同国際関係学生セミナー

昭和53年6月24日（土）

国際交流の「場」と「機会」を提供することを主たる目的とした国際セミナー館はついに竣工した。これまでの他の建物に比べ、かなり大きいので、多摩の丘に占めるその風景は偉観である。屋上一面に描かれた天の川の大空は、見れば見るほど国際セミナー館の運命を象徴しているようで、夢を生む図柄である。午前11時、緑の蔭を濃くしている国際セミナー館前の広場は、三〇〇人の来賓と教授・学生の姿でうずまった。この日の歓びが現われている。

青山学院大学聖歌隊により長期セミナー館の大セミナー室バルコニーで「グロリア」のコーラスが歌われる。英語の標語が除幕される。テープカットが行われる。まさしく栄光の門出である。それぞれに主役を演じられたスチュアート氏夫妻と茅誠司先生、大浜英子氏の手が動くとき、参会者の拍手がわきおこり、丘から谷間へと流れた。館内を一巡して、一同講堂に集合。

11時30分、記念式典開会。国際プログラム副委員長広野教授の司会で、歓びの歴史をつくる式典は進行した。青山学院大学聖歌隊が佐藤元洋氏指導、唐津東流教授指揮によって、「大学セミナー・ハウス讃歌」を合唱されたこと、日本女子大の学生時代に共同セミナーに参加されたことのある高橋園子さんのピアノ演奏が式典の流れをたすけた。そして来賓祝辞の中では、かつてICUの学生時代に国際学生セミナーに参加され、東大大学院に進まれた韓国の申熙錫君が若者を代表されたこと、一方において異例ともいうべき総理大臣のメッセージ、外務大臣のメッセージと、そして忘れてはならないのは、文部省在勤中、蔭になって大きな協力と支持を寄せられた木田前次官が、退官辞令直後の繁忙の中を出席されたことなどを考え合わせると、大学セミナー・ハウス開館十三年の歴史の重みが堂内に充満していたことのあかしといってよかろう。



記念式典：司会する広野良吉教授

館長は経過報告についで、設計、建築、施工の担当者が創立より現在まで変らないことについて、そのご縁が信頼を生んだことに対する感謝を述べ、基本設計の家元ともいうべき吉阪隆正早大教授を先ず紹介し、ついで施工者清水建設内田武二常務、設備の昭和温調井上治雄常務を紹介して記念品を贈呈し、最後に設計監督を担当されたU研究室の松崎義徳主任研究員に心からの感謝を捧げた。飯田、松崎のコンビありてこそ、キャンパスはいまの姿につくられたといっても過言ではない。

約二時間に及んだ式典は祝福のうちに終了した。出席者が多数なので、主なる来賓は交友館に、学生の大部分は食堂に設けられた祝宴の席についた。5月に落成したばかりの交友館は、再び祝賀パーティの会場となり、なごやかな風景をくりひろげていた。参会者は異口同音に交友館キリンサロンのすばらしさを称賛していた。

故正田建次郎先生の御令弟日清製粉会長正田英三郎氏、創立当初の共同セミナーの企画に貢献された東大名誉教授松田智雄氏、八王子市長後藤聰一氏、法政大学総長中村哲氏、上智大学理事長柳瀬睦男氏、国際教育振興会理事長板橋並治氏などのお顔が見えた。新旧の交わりをかわすことができた好機会であった。

13時30分、講堂において記念講演会開会。国際プログラム委員長川田侃教授の司会の下で、当代の学界と財界を代表する講演者によって、この国際セミナー館の門出にふさわしいテーマの講演が行われた。向坊、岩佐両氏が多忙の中を登壇されたことに深甚な感謝を捧げたい。この講演会を起点として、国際セミナー館が堂々と日本の社会にデビューすることになったことを幸せとしたい。

講演会が終って、15時30分より本館食堂に設けられた懇親パーティが開かれた。遅れて午後に出席された来賓の顔も加わり、殊に千人会員の方々も多く、パーティの雰囲気の中に親愛の友情がただよい、時のたつのも忘れて歓談がつづいた。食堂の心づくしの料理が好評であった。梅雨どきなので、雨の心配をしたのであるが、幸いにも好天に恵まれ、夕刻まで喜びがこの丘をつつんだ。

＊　＊　＊

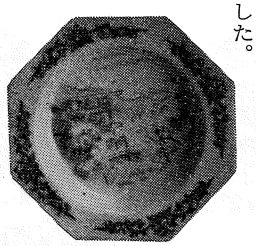
なお、記念品として八王子市在

◇プログラム

昭和53年6月24日（土）

受付開始（10時）
◆英文標語の除幕（11時）……国際セミナー館正面
アジア財団日本代表
J・L・スチュアート夫妻
◆テープ・カット……国際セミナー館正面入口
初代館長　茅　誠司
故大浜信泉氏夫人　大浜　英子
＜合唱＞
青山学院大学聖歌隊「グロリア」
◆落成式（11時30分）……講堂
＜司会＞
国際プログラム委員会副委員長
成蹊大学教授　広野　良吉
＜開会音楽＞
青山学院大学聖歌隊
「大学セミナー・ハウス讃歌」
＜経過報告＞　館長　飯田宗一郎
＜挨拶＞　初代館長　茅　誠司
＜感謝と記念品贈呈＞　館　長
＜ピアノ独奏＞
共同セミナーOG　高橋　園子
「ベートーヴェン作曲＝ソナタ Op.2 No.1」
＜メッセージ＞
内閣総理大臣　福田　赳夫
（飯田館長代読）
外務大臣　園田　直
（岡照外務省文化事業部文化第二課長代読）
＜祝辞＞
前文部事務次官　木田　宏
一橋大学名誉教授　板垣　與一
日本学術会議副会長　名取　礼二
アジア財団日本代表
J・L・スチュアート
NHK中央研修所教授
寺脇　信夫
上智大学客員教授　G・クラーク
東京大学博士課程　申　熙錫
東京外国語大学学長　坂本　是忠
国際プログラム委員長
上智大学教授　川田　侃
◆祝宴……交友館・食堂
◆記念講演（13時30分）……講堂
＜司会＞
上智大学教授　川田　侃
＜講演＞
「大学の国際化」
東京大学総長　向坊　隆
「最近の国際経済情勢」
富士銀行相談役　岩佐　凱実
◆ティー・パーティ（15時30分）……食堂

住の画家行近壮人氏の画く国際セミナー館風景が焼付けられた有田焼の小皿（左の写真）を来賓に贈呈した。



＊　＊　＊

主なる出席者は次のとおり。（順不同・敬称略）

茅誠司夫妻、大浜英子、正田英三郎、ジェームス・L・スチュアート夫妻、川田侃、広野良吉、佐藤元洋、高橋園子、木田宏、板垣興一、名取礼二、寺脇信夫、グレゴリー・クラーク、申熙錫、坂本是忠、向坊隆、岩佐凱実、吉阪隆正、松崎義徳、岡村昇、内田武二、酒瀬川康夫、金子三郎、井上治雄、石井久夫、野口昇、西村俊道、岡照、長谷川修一、河原猪三雄、飯田英夫、池井優、池田貞雄、石塚司農夫、板橋並治、伊東三彦、乾崇夫、宇野重昭、大木英夫、大野佐喜子、大畑篤四郎、奥繁光、小俣武夫、小俣安正、公文俊平、坂本一雄、小久保英雄、後藤聰一、斎藤恵彦、桜井賢一、示村悦二郎、杉山茂雄、洲崎芳弘、鈴木隆雄、田北敏行、塩月賢太郎、都留春夫、鶴見和子、東条吉彦、内藤正、長里静子、中村哲、中村哲哉、西川潤、西沢弘喜、布川角左衛門夫妻、唄孝一、橋爪斌、長谷川富士雄、浜田喜美子、原一雄、原島幸太郎、東寿太郎、土方保夫妻、秀村欣二、日比野重久、平出宣道、藤本紘、細谷千博、前田護郎、増田一男、松下智、松田智雄、宮坂宏、三輪公忠、武藤聡雄、村田正敏、望月賢一郎、柳瀬睦男、山本満

◈第37回理事会・第22回評議員会

昭和53年6月9日（金）／日本工業倶楽部

▼昭和52年度事業報告・決算報告
▼昭和53年度事業計画・収支予算
▼役員人事

【出席者】
顧問　増田四郎、森戸辰男
理事　川喜田愛郎、茅誠司、石川忠雄、戸田修三、沼田稲次郎、福原満洲雄、麻生平八郎、中村哲、飯田宗一郎、海老沢義道
監事　福與正治
評議員　鈴木皇、佐藤朔、三宅彰、吉識雅夫、平出宣道、小谷正雄、松田武彦、岡茂男、岡本素光（代）

◇

理事会・評議員会合同会議のため、評議員会の議案については沼田稲次郎氏が議長となり審議が進められた。

議案は、総括報告を飯田館長、事業報告、事業計画を総務部長、決算報告、収支予算を経理課長よりそれぞれ説明、すべて承認可決された。

役員人事については任期満了に伴う改選期であり、原案をもとに慎重審議の結果、左のとおり決定した。

国際セミナー館正面の書額と作者の書家松本筑峯氏

◇新任された理事
一橋大学学長　蓼沼　謙一氏
東京工業大学長　斎藤　進六氏
東京外語大学長　坂本　是忠氏
前国連大使　斎藤　鎮男氏
新日本製鐵会長　稲山　嘉寛氏

◇退任した理事
東京農工大学長　福原満洲雄氏
東洋大学学長　磯村　英一氏
法人職員　海老沢義道氏

◇再任
一九名は引続き理事として再任。

◇後任理事長の選任は延期さる
故正田理事長の残任期間を満了された川喜田理事長の後任については、関係者の間で物色中であったが、この日までに内定する運びに至らず、評議員会につづいて開催された理事会は、理事長人事を付議することができなかった。

▼予算、決算の説明

(1)決算で会員校会費収入が一七%を占めているが、将来の方針としては二〇%になるよう増額してほしい。

(2)国際セミナー館が落成する

（4頁5段目へつづく）

昭和52年度総括収支決算書（52.4.1～53.3.31）

収入の部 科目	金額（円）	支出の部 科目	金額（円）
財産収入	401,351	(1)一般経費	175,566,455
寄付金収入	1,188,295	人件費	80,594,280
会費収入	26,100,000	事務費	8,199,508
協力会員校会費	26,100,000	法人諸費	1,277,989
事業収入	91,434,865	土地建物費	9,450,195
宿舎収入	69,704,280	事業費	45,644,483
施設収入	14,057,047	一般事業費	6,967,834
食堂収入	7,673,538	学生指導セミナー	10,650,876
施設改修協力金	5,428,300	普通セミナー	23,921,952
補助金収入	11,861,000	国際プログラム	4,103,821
国庫補助金	9,861,000	特別施設改修費	30,400,000
日本万国博覧会記念協会補助金	2,000,000	計	175,566,455
セミナー会費収入	5,149,500	（収支差額）	(△26,403,695)
学生指導セミナー	4,387,500	(2)特別経費	19,249,899
国際プログラム	762,000	固定資産減価償却費	19,120,068
千人会補助	5,162,057	固定資産除却費	129,831
雑収入	2,437,392	計	19,249,899
		支出合計(1)+(2)	194,816,354
		当期剰余金	△45,653,594
合計	149,162,760	合計	149,162,760

昭和53年度総括収支予算書（53.4.1～54.3.31）

収入の部 科目	金額（円）	支出の部 科目	金額（円）
財産収入	500,000	人件費	93,509,000
寄付金収入	700,000	事務費	12,994,000
会費収入	28,300,000	法人諸費	1,900,000
協力会員校会費	28,300,000	土地建物費	12,740,000
事業収入	133,038,000	事業費	50,509,000
宿舎収入	100,526,000	一般事業費	8,642,000
施設収入	23,672,000	学生指導セミナー	12,830,000
食堂収入	8,840,000	普通セミナー	25,037,000
施設改修協力金	5,632,000	国際プログラム	4,000,000
補助金収入	16,904,000	特別施設改修費	7,018,000
国庫補助金	16,904,000	前年度繰越未払金支払充当額	14,790,000
セミナー会費収入	5,370,000	予備費	6,000,000
学生指導セミナー	4,520,000		
国際プログラム	850,000		
千人会補助	6,866,000		
雑収入	2,150,000		
合計	199,460,000	合計	199,460,000
		（資金調整）	
		次年度繰越未払金	32,894,000

〈国際セミナー館落成記念〉

国際学生シンポジウム

主題――文化接触と日本

――新世界秩序と日本の役割――

期日――昭和53年6月23～24日

≪シンポジウムの提題者≫

1　近代化におけるモデル交換について―特に日本と中国の場合
　上智大学教授　鶴見和子氏

2　文学をつうじての文化接触
　―中心指向から周縁指向へ―
　作家　大江健三郎氏

3　魂にまで及ぶ文化接触
　東京神学大学教授　大木英夫氏

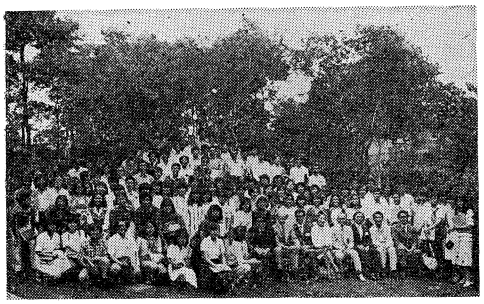
4　転機の世界秩序
　早稲田大学教授　西川　潤氏

5　人間関係社会と原則関係社会
　―欧米が日本から学ぶべきこと
　客員研究員
　グレゴリー・クラーク氏

6　戦後パラダイムの終焉
　東京大学教授　公文俊平氏

≪総合司会・運営委員長≫
上智大学教授　川田　侃氏

≪参加学生≫115名（内女子53名）
ⓐ国籍別（計9ヵ国）
日本(102)、中国(台湾)(4)、タイ(3)、大韓民国、シンガポール、オーストラリア、トルコ、スイス、アメリカ合衆国（各1）
ⓑ大学別（計26校）
早大、津田塾大（各15）、上智大(10)、東大(9)、慶大(8)、東女大(7)、東外大(6)、青学大(5)、東工大、筑波大(各4)、お茶の水女大、ICU、立教大(各3)、明学大、駒澤大、東海大(各2)、一橋大、中大、明大、日女大、学習院大、聖心女大、横浜市大、埼玉大、国際商大、創価大(各1)、その他(1)、他に社会人6



盛況：国際学生シンポジウム

◇◇

この国際学生シンポジウムは、国際セミナー館の落成を記念して特に企画されたもので、同館落成の前夜から記念式当日にかけて実施された。この形式の国際学生プログラムは初めてのことであったが、幸い当ハウスの国際プログラム委員会の川田侃委員長が自ら企画を担当されることにより、落成を祝うにふさわしいシンポジウムの実現をみることができた。

昨年末実施の第5回国際学生セミナー以来新しいシリーズの主題となった「文化接触と日本」が、このシンポジウムでも総合テーマとして引き継がれ、副題には「新世界秩序と日本の役割」が選ばれた。戦後の経済体制の崩壊を契機に国際秩序は今大きな転機にさしかかっているが、この従来の世界秩序と価値体系の中で近代化を求め、発展を続けてきた日本もまた当然、新たな針路の選択を迫られている。今や世界に普遍な諸問題に目をみひらきながら、そこに日本が果たすべき独自の役割とは何であろうか。このきわめて今日的な問題を多面的にとらえるため、別記六人の方々でシンポジウムの提題者を構成し、総合司会には川田侃氏が当たられた。いずれもそれぞれの専門分野で独自の理論を展開され、またその幅広い視野と深い問題関心で著名な方々ばかりなので、学生側の期待は大きかった。

◇◇

プログラムは夕食会から開始された。シンポジウム参加者に宿泊グループが加わり、総勢二七〇名が食卓を囲んだ。夕食会としては開館以来の最多人数であった。食後は各グループの紹介が行われ、利用者相互の交歓のひとときとなったが、人数ばかりでなく、当ハウスにふさわしい顔ぶれが一堂にそろい、くしくも国際セミナー館落成の前夜祭となった。

夜7時からのシンポジウムは、三時間にわたって行われたが、六人の先生方によるきわめて密度の高い提題に、ある時はノートをとることも忘れて、食い入るように提題者を見つめ、真剣に耳を傾ける学生達の姿が印象的だった。シンポジウムにおける提題の要旨は別掲のとおりである。

シンポジウム：左より鶴見，大江，大木，川田，西川，公文，クラークの諸氏

◇◇

二日目のプログラムは前夜参加者から提出された質問に関し、まず先生方がその代表的な質問を紹介、その上で意見をのべ、フロアーからの質問にも答えるというかたちで、国際セミナー館落成記念式典開始の午前11時直前までの二時間続けられ、その後参加者全員は、式典、昼食会、記念講演、そしてお別れパーティともなった午後のお茶の会へと続く一連の記念行事に加わり、同館スタートの意味に思いを寄せ、相互の交流を楽しんだ。

今回の主題が提起する本質的な諸問題を深く掘り下げて議論するには、一泊の会期は余りに短かすぎたといわねばならない。参加学生の共通の〝欲求不満〟は討論と諸問題を深く掘り下げて議論するには、一泊の会期は余りに短かすぎたといわねばならない。参加学生の共通の〝欲求不満〟は討論と

（3頁3段目よりつづく）

と、利用ベッドが二四〇から二七〇に増加するので、事業収入の増加に努力し、財政の確立を期したい。

(3)宿舎、セミナー室の全面改修工事を行い、三千八百万円の臨時支出を行ったので、予算に赤字繰越が計上されている。これは経営努力による事業収入の増加を図り、三、四年で解消したい。

(4)予算の利用者延人員を五万二千人とし、52年度より四千人増を見込んでいる。

(5)文部省補助金は新年度五〇〇万円増額されている。

(6)開館十周年記念募金は、未だ目標に達しないうちに指定寄付の指定期限が終了したけれど、今後は試験研究法人の許可をうけたので、第四番目の建築を行うとすれば、八千万円の継続募金が必要である。

(7)交友館、国際セミナー館の新築により、収支ともに約五千万円の増額となっている。

▼筑波大学、文教大学が会員校に加入する

この二大学を新たに会員校に迎えたので、五三校となった。筑波大学の加入は、昭和53年3月をもって閉学された東京教育大学の代替を意味している。本法人創立以来の関係を継承されたものと理解している。教育大学長時代は有力な理事であられた宮嶋龍興氏が、現在筑波大学長であられるから、協力の継続を期待したい。

文教大学はよそおいを新たにした大学で、元東京都教育長の小尾乕雄氏が学長である。

意見交換の時間がきわめて制約されていたことにあろう。初日、夜のプログラム終了後、会場の講堂を去ろうとしない参加者は、自然発生的に幾つかの輪を作って話し合いを始め、翌朝もまた集会開始前の寸刻を惜しんで提題者を囲んでいたが、所詮、諸先生がさまざまな観点から披露された密度の高い発題内容を一時に咀しゃく吸収することは不可能に近く、「消化不良に陥った」との声もあったほどで、「せめてもう一泊出来れば」の要望も当然であろう。

限られた時間の配分と調整に一番苦労されたのは、司会の川田委員長であったにちがいない。同委員長は閉会に際し、「もっとも、この人類共通のグローバルで根源的な問題は、何泊やろうと恐らく論じつくすことは出来ないと思います。将来を背負うべき皆さんが、このシンポジウムから何かを汲み取り、その中から自分の独自性と創造性を掘り起こし、互いに切磋琢磨していく中で、一泊の多摩の丘の勉強会が役に立てば、大変ありがたいと思います」と述べられた。「不消化」を嘆いた参加者の一人もその後寄せた感想文の中で、「この一泊二日のお話は、どれも、消化器官を整えながら、もう一度味わいなおすところから始める必要があると思っている」と述懐している。

「本を通してしか知らなかった先生方」、「一度お会いしてみたかった方々」に直接接触できたことも参加者にとって幸せなことであった。また、宿舎村で「諸外国の留学生とごく自然に交流できた」ことも、大学のキャンパスでは得難いことのようで、多くの日本人学生にとって、これまた刺戟に満ちた、新鮮な体験だったようだ。

「共同の生活体験を通じて人間的交わりを深めること」、「意見が対立するにしろ、一致するにしろ、互いに全人格的に衝撃を与え合うこと」が国際セミナー館の目指す国際交流であるとすれば、今回のシンポジウムもまた、同館の落成を祝うにふさわしい集会だったといえるであろう。

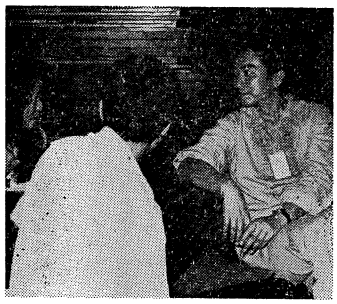
◇◇

今回のシンポジウムには、前記の第5回国際学生セミナーに定員超過のため参加できなかった日本人学生を最優先で受け入れることとしたため、一般公募はごく少数に限定したが、結果は、八ヵ国の在日留学生一三名、社会人六名を含む一一五名という、まことに適正規模の参加者構成となった。申込書の「応募理由」欄には、表現は異なれ「従来自明の理とされていた諸理論およびモデルの批判的再検討の必要」を感じ「よりグローバルな視点で、一日本人としてこれからの世界に生きる道を見窮めたい」とする強い問題意識をうかがうことができた。

⊠シンポジウムから⊠

シンポジウムにおける諸先生の発言から、提起された問題点を概括してみたい。

▼まず**西川潤氏**は、戦後の世界秩序、あるいは国際秩序の変化というものは、実はここ四世紀ほど続いてきた「文明国と野蛮国」とを分ける一元的文明観に根ざした西欧優位体制の終わりを意味するとして、豊富な事例を通してこれを歴史的に裏づけ、われわれが新しい国際秩序として考えている内容が次の二点であると述べた。一つは、世界経済の拡大、相互浸透が進んでいく中で、世界は一つの社会であるという意識が出てきたこと、つまり人口、資源、環境、軍縮といったことが、政府機関のみならず民間代表をも含めたところで論議されることの意義であり、二つには、これまで下積みにされてきた人々の発言権の増大ということである。このような新しい状況の中で、日本の果たし得る役割を、西川氏は、侵略国であった日本は同時にアジアの一国であったからこそ原爆の被害を受けたとして、「非西欧世界に対しては何でもやれる」という西欧世界の意識の被害者の立場が持つことのできる平和意識と、西欧的無限成長論を信じた結果、環境を破壊し公害患者を生み出したことから生まれる人権の意識の二つを指摘された。


西川潤氏

▼**公文俊平氏**は、西川氏の提題を受けて、近代優位体制の終りが比較的近いということには疑問で、まだ百年はかかるのではないかと述べてから、発言のテーマを「戦後パラダイムの終焉」とした理由を、「イデオロギーの終焉」とすべきだったかも知れないが、「変化しなければならぬ」という意味合いを強調したかったので使ってみたと前置きして、戦後の日本において、いわゆる保守・革新の意見の対立が、急速に一つの合意の方向に向かいつつあるということを、氏の関係している政策構想フォーラムが出した提言「脱保革時代の政治ヴィジョン」にふれて述べられた。その論拠として、対立の基盤に次のような基本的な合意があったとして、①日本の社会構造のあり方、②国際社会における日本の地位、③日本の国家目標、の三点をあげ、一言でいえば、①とは民主社会であり、②とは平和、③とは福祉、ないしは経済成長である、と述べて、その共通点を前提にした上で、むしろ副次的な対立軸にすぎないところで保守・革新が相争ってきたのではないか、という問題提起をされた。最後に、このようなコンセンサスは、一〇年、二〇年後に襲ってくるかも知れない異常気象や資源エネルギーや食糧の危機、それに基づく世界的な政治の不安定というものが、かなり高い確率で予想されるならば、全く意味をなさない。前述の①から③に関して、新しい事態に対処していくことの出来るコンセンサスがどうしても必要ではないか、と結ばれた。

▼**G・クラーク氏**は、日本の社会がユニークである点を、日本人論として一般にいわれている〝タテ社会〟〝義理人情社会〟〝甘えの社会〟などを例にしながら、欧米にも決して類似なことがないわけではないが、そこに共通していえる両者の違いは、日本が人間的な価値観による社会であるのに対して、欧米は原則を重視する社会である、と指摘された。そして、なぜこのような違いが起きているかを日本は外国と戦争する経験を持たなかったからではないかと述べ、その理由として、外国と戦争するためには自分の優位性を示すための、一つの思想の体系であるイデオロギーが必要とされるからであると指摘された。したがって欧米では、イデオロギーや普遍的な原則が重視され、人間関係は二次的なものになり、むしろ遅れている社会の特徴であると考えられるようになったが、一体、イデオロギーを持つことがそれほど立派なことであろうか、と問題提起をされた。原則にこだわる人間は科学や哲学をつくるが、人間関係にこだわる人間はそれが不得手である。しかしそれは intellectualism の問題ではなく、intellectualism の問題であって、これがもっているところの合理性や原則に日本人はこだわらないために、日本人には現実主義という利点があることを強調された。最後に「イデオロギー社会は意外にもろいが、日本は細胞社会であるから柔軟性に富んでいる。互いに適応しながら新しい社会を作り上げる日本人に欧米人は学ぶべきではないか」と締めくく

られた。

▼**大木英夫氏**は、和魂洋才が文化形成の指導的理念であった日本の近代社会において、「魂にまで及ぶ文化接触」という生き方を体現した植村正久という一人のキリスト者を通して、今日のわれわれが直面している文化接触の問題を問いかけられた。「日本の花嫁」という小冊子の中で、西欧の観点から日本の家庭生活や結婚の風習を批判した田村直臣を牧師職から追い出した植村は、「武士道」を出版し日本の魂を広く外国に紹介した新渡戸稲造をも、「台所や居間をはずして床の間つきの部屋のみを外国に紹介したに過ぎない」というふうに批判した。その植村において見い出すことができるのは、「自分の国から抜け出していながら日本的である、言いかえれば超越的でありながら内在的である精神」であるということを、アメリカの政治学者モーゲンソーがラインホルト・ニーバーについて、「永遠の相の下にアメリカ社会を見ることができる人間」であると評価したことにふれながら、大木氏は指摘された。そして「これから必要とするのは、欧化主義と日本といったテーゼとアンチテーゼの中に埋没して、不毛なジグザグコースを辿るのではなく、植村正久のような人間に見る精神ではないか、それはまた、自国のみならず外国のいいもの、悪いものを識別することによって、世界共同体を造るという課題を担う人間ではないか」と結ばれた。

▼**大江健三郎氏**は、中江藤樹の育った田舎で生まれ、彼の弟子の子孫だというふうに思いこまされて育ったが、最近、小林秀雄の『本居宣長』を読んで、その中に出てくる藤樹側の秩序に抵抗した泥棒の親分の子孫ではなかったかと思うようになったと語り、藤樹的なものも認め、かつ泥棒の親分的なものをも認める地方の人間として自分が育っていたら、今よりもっと自由だったのではないか、ということを導入部として、文化というものは、中心的力—中心文化—がある一方で、それを相対化する力—周縁文化—があり、二つの間のダイナミズムが生かされている時に生き生きとした力強いものになる、ということを示された。それは氏の地方のみが立ち遅れているのではなく、日本の近代化そのものに、そうした傾向があったとして、日本の近代化が西欧に中心を置くと同時に、裏を返せば国内では天皇制という単一の文化によって作られてきたことを指摘された。竹内好氏が一九四八年に魯迅について書かれた文章を引用しながら、日本の近代化についてと同様のことが日本文学についても言えることを明らかにして、最近、ラテン・アメリカ文学が紹介されるようになったり、朝鮮の詩人の作品を読もうとする傾向に触れながら、中心と周縁を包み込み、互いに相対化しながらダイナミックな運動を導き込もうとする文学の主題のとらえ方、表現のしかたを、詩学的に、あるいは文学の学として考えれば、その一つとしてグロテスク・リアリズムの問題が出てくる、と述べられた。上のものを下に引き降す、下のものを上に引き上げる、すなわち、ある固定した秩序によって、限定され死にかかっているわれわれのイマジネーションを生き返らせるものがそれであって、日本の近代文学の中に見い出すことはむずかしいが、朝鮮文学の中には例えば金芝河の「糞氏物語」という詩の中に見ることができるとして、これを紹介された。ここに表現されているものは、日本に対する風刺ということにとどまらず、グロテスク・リアリズムから見れば〝糞〟は土の中に入って滋養になり新しい生命を実らせるように、死を通じての再生を意味しているわけで、日本の絶対化を超えて、アジア全体に和解を招来するような日本人の再生を表わしている詩でもあるとの見解を述べられた。結論として、「一つの周縁性を日本文学に導入することによって、日本文学は新しい方向づけを持ち得るのであり、われわれはものの見方、考え方に相対性あるいはダイナミズムを受け入れ、近代化以来の傾向である単一主義、絶対主義から文学を媒介にして抜け出していきたい」としめくくられた。

大江健三郎氏

▼**鶴見和子氏**は、西欧の近代化が普遍的なモデルであり、この方向に非西欧社会がどの程度近づいたかを考えるのが国際比較であったが、この図式に最も顕著な挑戦をしている社会が中国であるということを、いくつかの例を引きながら明らかにし、近代化のモデル交換の時代に入ったことを指摘された。そしてこのモデル交換を「内発的発展における創造性の問題」として考えてみたいと述べ、最近このように考えるようになった契機を与えられたというシュバーノ・アリエッティの『Creativity』に言及して、「内念（言葉にもイメージにもなっていない、表現されない一種の認識）と既成の概念、内念に対応する古代論理と概念に対応する形式論理、その両者が統合されるような新しい概念ないしカテゴリーを作るときに、はじめて創造的でありうるという点を引用しながら、内念ないし古代論理は国際的なレベルで考えれば第三世界の持っているものに近いし、概念ないし形式論理は欧米社会のものに近いとして、氏の考えている「内発的発展における創造性」とは、第三世界あるいは周辺の持っているものと、中央の国の持っているものとをコンフロントしながら新しい世界を築き上げていくことである、と述べられた。そして中国の中の〝現代化〟の中に一つのモデルを見い出したとして、中国の大慶で目のあたりにしたという石油コンビナートに触れられた。そこでは地下に工場があり地上に畑があって、農業と工業とを同時に一つの場所で実現している。農村をどんどん浸蝕して都市が作られていくことを開発と考えてきた者の受けた一つの感動を語り、日本における第三世界、すなわち氏にとっての原点は水俣であると述べられた。被害を受けて苦しんでいる人達の感覚を作家である石牟礼道子氏が代表して語ってくれているが、どうしたらそれらの人々の感覚が持っている世界を、発展とか近代化という世界の中に結びつけることができるか。それには自然に対する考え方、対し方が全く異なるので、もう一つの新しいカテゴリーを生み出さなければならないのである。中国だけでなく発展途上国も新しい創造を目指すであろうが、その時に日本はどのような役割を果たすことができるかと問いながら、次のように提題を結ばれた。「日本が新しいものをとり入れるときに古いものを残している点は非常によいが、コンフロントを避けて、一つ一つ切り離して保存している。それをどうしてコンフロントさせて、一つの融合体を作ることができるか。古いものと新しいものを同時に持っている日本は、日本自身が変わることによって、一つの触媒の役割を果たすことができる」と。

鶴見和子氏

国際セミナー館落成記念＊＊＊特集＊＊＊＊＊

JAPAN AND THE WORLD: THE CULTURAL INTERFACE

歓びの歴史をつくる：昭和53年6月24日

先導者の手でテープカット：茅誠司先生と大浜英子氏

●挨拶

初代館長　茅　誠司

今から十四年前に、セミナー・ハウスが開館した際に、館長を仰せつかりました。飯田さんが私のところに来られまして、この館の構想を語られましたとき、「それはいい構想だ。しかしお金はどうする」と答えました。大浜信泉先生、上代たの先生と私の三人とも、構想には賛成だが、お金についてのアンサーは何もなかったのです。その時に、三井銀行の佐藤喜一郎会長がご賛成くださり、これはいいことだということで、どんどん話が進み、昭和40年に建物が出来て開館したわけです。最初の開館式には、雨が降り、舗装されていないので道が悪く、共同セミナーの初代運営委員長をされた永井道雄さんが、「あなたは館長だから、責任ある返答をしてほしい。便所が下の方にあるが、階段も電灯もない」といってこられたことを昨日のように思い出します。それ以来、今日まで、ブルドーザーといわれた飯田さんの努力で発展の歴史を綴って来たのであります。

今日、ここに国際セミナー館が出来ました。私は、大学セミナー・ハウスに、これが出来なければ、本当の意味での責任を果たせないと思っておりました。募金委員としてご協力くださった方々に心からのお礼を申し上げたいと思います。

この国際セミナー館が今後どのような評価をされるかは、皆さんの責任であります。これを用いて、良いプログラムがなされれば、そして、立派な成果を挙げられれば、世間は納得してくださるものと思います。

●経過報告

開館十周年記念寄付金、日本自転車振興会補助金を建築資金に

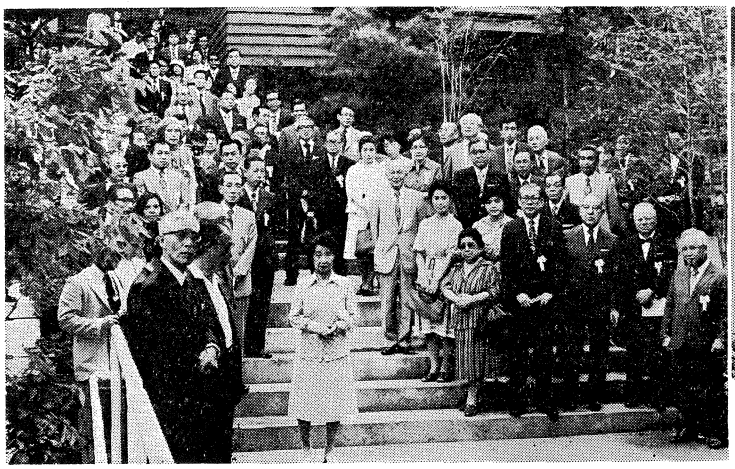
館長　飯田宗一郎

開館以来十四年の歩みをつづけて来ましたが、その間の貴重な業績の中から、国際セミナー館の構想は芽生えました。ことわざに「仏作って魂入れず」というのがありますが、むしろその反対で魂ができたところに仏がつくられたわけであります。そして本日、アジア財団日本代表スチュアート氏ご夫妻の手によって除幕された標語は、そのことを表わしているといってもよいでありましょう。"Japan and the World: The Cultural Interface"は、この国際セミナー館が建設されるに当って設けられた国際プログラム委員会が、昭和52年12月16～18日に開催した国際学生セミナーの主題として決定されたものであります。文化接触と日本をテーマに、これから年々討議していくであろうこの「館」にふさわしい看板であると思いまして、標語に採用いたしました。その除幕をどなたの手に頼むべきであろうか。現在、国際交流の一つの拠点となっているアジア財団、そして当セミナー・ハウスの活動に協力と支持を寄せて下さっているスチュアート氏ご夫妻の手によって仏に眼を入れていただきました。

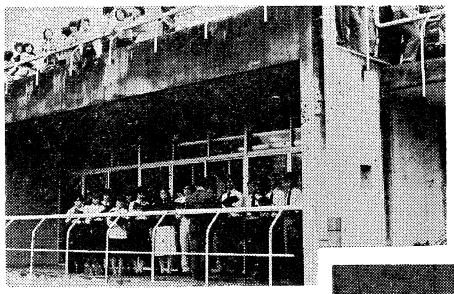
国際セミナー館の開設は、開館十周年記念事業の大きな目玉であります。今後の大学セミナー・ハウスが世界に向けて船出する本拠地を設けたわけであります。いわば国際的視野に立って行動できる日本人―国際的に通用する日本人にして世界市民を養成する本陣となってほしいという願望を秘めて建てられた建築であります。このような「館」の扉を開く手―テープカットをどなたに托すべきであろうか。創立の参画者の一人、茅誠司先生はいまもなお健在でこの席におられます。そしてもう一人の参画者大浜信泉先生は、いまは亡く、先生の奥様がこの席におられます。茅誠司、大浜英子御両人の手こそ、現在の大学セミナー・ハウスが望むことのできる最良の手であります。御両人の手によってテープカットが行われ、多摩の丘にこだまする万雷の拍手がこれに和し、いともおごそかに門出いたしました。青山学院大学聖歌隊のコーラスが会衆の心をこのひとときに結びつけ、その聖なる歌声が緑の丘に流れていきました。実に温い、美しい光景でした。

この建築資金は新日本製鐵会長稲山嘉寛氏を委員長とする募金委員会の寄付金（一億一、五〇〇万円）と日本自転車振興会の補助金（四、五三三万円）によるものであります。創立以来、今日まで続けて下さる財界のご協力は感謝の至りであります。それにつけても、その協力の根元にいまは亡き三井銀行の佐藤喜一郎氏がおられたことを忘れてはなりません。

この国際セミナー館は、まさに善意と希望と信頼から生まれた産物です。私はこの建物を利用される学生諸君に"Make Clean"を心がけて下さるよう切望します。「見ること」は「知ること」につらなります。本日ご出席下さった皆様の胸の中に、国際セミナー館はその目的を直接お伝えしたことでありましょう。



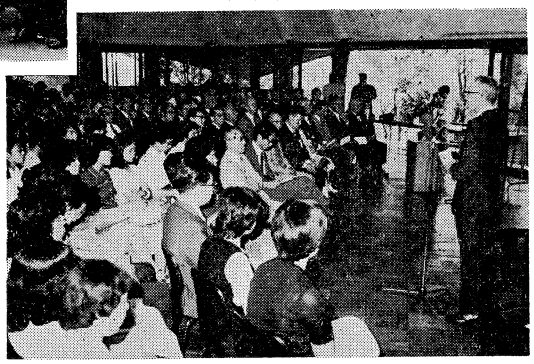
↑ 除幕して標語を仰ぐスチュアート夫妻



↑ 除幕とテープカット寸前の参列者全景

→ 式典：経過報告する飯田館長

← テープカットを合図する聖歌隊のコーラス(下)と屋上の歓声



← 聖歌隊の合唱

↑ 来賓：左より板垣，スチュアート夫妻，大浜，茅，木田，正田，名取の諸氏

◈祝　電

三笠宮崇仁殿下

大学セミナー・ハウスの今日までに果された成果を感謝し、国際セミナー館の落成を祝するとともに、今後のご発展を祈ります。

「大学セミナー・ハウス国際セミナー館」落成祝賀

◈福田総理大臣メッセージ

大学セミナー・ハウスが開館十周年記念事業として企画された「国際セミナー館」が、本日、ここに落成の運びとなりましたことに対して、心からお祝い申し上げます。

顧みますと、大学セミナー・ハウスが昭和四十年に誕生して、国公私立の枠を超えた大学共同の交流の広場を作ったことは、我が国の大学学問交流の歴史に、画期的な新しい一ページを開いたものでありました。それ以来十年の歴史を経て、大学セミナー・ハウスの活動も飛躍的な発展を遂げております。そして、近年、日本が国際化するとともに、大学セミナー・ハウスの活動にも、世界に眼を向けた活動、国際交流の分野が大きく加わって参りました。

今回落成した国際セミナー館は、このような大学セミナー・ハウスの発展を象徴するものに他なりません。それだけに、大学セミナー・ハウスが、国際セミナー館の開館を契機として、今日ますます重要性を増しつつある学問研究の分野における国際交流に大きな貢献をすることになるものと確信いたします。

本日の国際セミナー館の開館を機会に、その実現に心血を注いで来られた関係者の皆様方の国際交流に対する熱意に対して敬意を表するとともに、この新しい理想に基づいて創立された「開かれた大学」が創立の日の高い理想をしっかりと踏まえつつ、国際理解の増進の実を挙げられることを心から期待いたします。

昭和五十三年六月二十四日

内閣総理大臣　福田　赳夫

◆祝辞

前文部事務次官

木田　宏

私は今、式典に参列しながら、二十数年前に木田みのる氏が記しました「気違い部落周遊紀行」という一連の作品を思いうかべておりました。彼は八王子の郊外に住んでいて書いたのです。私も、ここにおられる学生諸君とあまり違わない年頃で、一生懸命それを読み、たしかに都会人のセンスと部落の人のセンスとは、ずいぶん違うものだと感じました。

私は、八王子の野猿峠に大学セミナー・ハウスが出来たということは非常に意義深いと思うのです。と申しますのは、日本の大学も一つの部落であり、閉鎖的であって、部落間のコミュニケーションが都会人のセンスのように、うまくいっていないのです。何とかしてその壁を破ろうという試みが

◈園田外務大臣メッセージ

財団法人大学セミナー・ハウスは、同セミナー・ハウス開館十周年記念事業として、昭和五十年に海外からの研究者や学生と国際交流を図り、相互に学問を深める目的で「国際セミナー館」建設を計画され、財界などの寄付及び関係者の御努力により、めでたく落成される運びとなりました。ここに心からお慶び申し上げます。

今日における我が国の学術、教育水準が世界的に誇りうるものであることは周知のとおりでありますが、このために諸外国との学術交流が大きく貢献していることは申し上げるまでもありません。

ここ八王子という新学園都市に、各国の学者や研究者が十人、二十人という小規模単位で集まり、寝食を共にしながら議論するという特色ある国際セミナー館が設立されたことは、非常に意義のあることと考えます。

また、同館では、従来日米学生会議等学生間の交流にも貢献して来ましたが、今後日本に来る留学生に日本についての基礎知識を修得させようとの計画をお持ちと伺っておりますが、国際交流のなかの留学生の占める重要性にもかんがみ、今後、国際セミナー館を通じたこの種の国際交流が増々活発に展開され、各国との相互理解を深めることに更に大きく貢献されんことを心から期待しております。

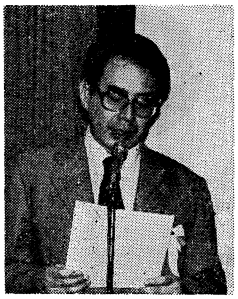
昭和五十三年六月二十四日

外務大臣　園田　直

↑ 記念講演を司会する川田侃教授

→ 岩佐凱実氏

← 向坊隆氏



↑ 外務大臣メッセージを読む岡照氏

↑ 祝宴になごむ来賓の顔々（交友館）　↑

このセミナー・ハウスであって、十三年間を経過して今日のような姿になっているのであります。

つい最近、私はオーストラリアに招かれて、彼地をみて感ずるのは、どうも日本全体が木田みのるの書いた部落に近いということであります。部落の人も都会には好奇心があります。日本人も欧米に好奇心を持っているが、どうも実行の面ではうまくいっていないように感じております。

この国際セミナー館によって、大学間の部落根性ではなく、日本という国の部落意識を乗り越える努力をしないと、二一世紀に日本がうまく存在し得ないのではないかと思うのであります。

日本学術会議副会長

名取　礼二

昨今、大学の大衆化という言葉をよく耳にするのでありますが、学生たちが、科学が文化の基盤であることを自覚し、世界各国の文化を理解し尊重し、知識を吸収し提供して、その交流を糧として、先見的な思索を重ね、思考を深めていくということは、極めて重要なことであります。

この新しい国際セミナー館が、そういう意味での「場と機会」を提供して下さるならば、若い人びとの豊かな感受性から考えて、必ずや実りの多いことを確信するものであります。

一橋大学名誉教授

板垣　與一

私は、過去二四年間、主としてアジアの留学生のために、一〇人位の小さいグループで毎月一回、本を読み、話を聞くという研究会をやってまいりました。全国に出かけて行って、ローカルの産業、文化、生活状態などを理解してもらう努力をしています。

ある時、四国の巡回も終る頃、インドの学生に感想を聞いたところ、「日本人はどこに行っても、日本語を話している」といいました。我々が当然と思っていることで、日本における文化の同質性を改めて認識したことがありました。

国際セミナー館が出来て、留学生を迎え、まず国際学生セミナーから始めて、やがては国際教授セミナーに発展していくとの構想をうかがいました。

先般、ビラ・セルベローニという所で、一七ヵ国からの教授たちとナショナリズムについて二週間の討論を行いました。結論的には、ナショナリズムは何であるか、ますますわからなくなったというか、全く相違する見解があるということがわかったのであります。これも国際教授セミナーの一つであると思います。

国際セミナー館の落成を契機に大学から世界に目を開き、理念に向ってたゆまずに前進し、永遠に

丘の上に花が咲き続けるようお祈りいたします。

アジア財団日本代表
J・L・スチュアート

私は今日、二つのことを申し述べたいと思います。

一つは、今まで、大学セミナー・ハウスに国際プログラムがなされていなかったという解釈をすることは誤りであるということであります。すでに、数年間にわたってアジア各国の人びとが集まって、ここで立派なプログラムが実施されていたのでありまして、これからプログラムが始められるわけではありません。今までのセミナー・ハウスの経験と精神に加えて、新しい設備を生かすということであります。

二番目に申し述べたいことは、この一年間、私に国際問題、国際関係について一番立派なアイディアをくださったのは、京都大学名誉教授、田中美知太郎先生の次の言葉でありました。「国際交流について、われわれが互いに持つべき条件が三つある。それは、『知識・勇気・友情』である」。私は大学セミナー・ハウスに何回も来ている者として、この三つにもう一つのことを加えたい。それは「平等」であります。

従ってこの新しい建物に対する私の希望は、Knowledge, Courage, Friendship & Spirit of Equality で進んでほしいということです。そうすれば、大学セミナー・ハウスの将来に必ずや一層立派な仕事が加えられることと確信するものであります。

NHK中央研修所教授
寺脇信夫

国際交流・国際理解ということは、私どもマスコミ界におります者にとっても、今日一日たりともゆるがせに出来ない重要な任務となっております。

ご記憶に新しいことと思いますが、バングラディシュのダッカで起こったハイジャック事件のときに、ダッカの放送機関がすすんで、NHKに対し衛星中継を通じて、あの空港の状況をつぶさに送ってくれました。その衛星中継に関係した人びとの約半数は、NHKで研修を受けた方々でありました。

それで、私は国際交流・国際理解の必要性を肌で感ずるのでありまして、相手のことを学ぶことも大切ですが、自国のことを相手に理解してもらうことが大切だと思います。

しかし、放送や印刷物による交流も大切ですが、人と人とのコミュニケーションが最も重要であると思います。

＊＊＊＊＊

東京外国語大学学長
坂本是忠

私は、大学セミナー・ハウスをはじめて訪ねて以来、常に、こういう雰囲気の中で教師と学生が交流出来ることのすばらしさを痛感しておりました。今日の大学は余りにもマンモス化しており、教育も荒廃しつつあるといわれておりますが、こういうところもあるのかと感心していたのであります。

今度、国際セミナー館が落成し、大学セミナー・ハウスが大学教育の国際化に寄与されることはすばらしいことだと思います。外国の大学はもともと国際性が備っており、その国際性こそ大学の使命なのです。従って、私は、まず私の大学の先生にセミナー・ハウスを利用していただきたいと考え、大いにすすめるつもりであります。

東京大学博士課程
申熙錫

昭和49年6月18日の朝日新聞は、「今日の問題」というコラムで「もう一つの大学が八王子の山の中に生きている」と述べています。もう一つの大学というものは、私にとって何であったか。

私は昭和47年から始まった国際学生セミナーに、引続き三回出席させていただきました。一回目の印象を、私は「セミナー・ハウス・ニュース」27号に次のように書いています。

「一外国人研究者として、国籍と考え方とを異にする多くの友人に出会ったことは、誠にうれしいことで、しかも対話の輪を広げることが出来たことは大きな収穫であった。」

二回目は、その報告書の中に「アジアの現状と日本の国際的役割を知るコミュニケーションの広場であった」と書いています。

三回目は、余程、私の心の中に葛藤があったのでしょうか、何か印象を書くようにとのご依頼をお断りしました。しかし、セクション演習のメモに次のようなことが書かれています。「大和民族は相手に対して、あたかも深い思いやりがあるかのごとく見せかける傾向がある。そして裏と表とがあまりにも違う。」

今日の案内状には、国家間の壁を越えて、真の意味での国際交流をと書かれていますが、国家の壁を越えるということは、簡単なことではない。同じ民族の心と心のふれあいでもむつかしい。

しかし、私は国際セミナー館という建物にではなく、そこに出入する人びとの考え方、言動に期待したいと思います。飯田館長は我々の父のごとき存在でもあるので、この活動が継続される限り、名実共に日本で研究している外国人に、日本国と日本人の考え方を理解させる広場を提供することが出来ると思います。

上智大学客員教授
グレゴリー・クラーク

実は私はこの大学セミナー・ハウスとは、特別のご縁をもっております。七年程前にここではじめての「日豪セミナー」が開催されました。その閉会式の挨拶で、オーストラリアの学生代表は、「このセミナーの成果を活用して、我々は広く外に出ていって新しい友人を作りましょう」と述べ、日本の学生代表は、「今回のセミナーを通じて、仲間の輪を拡げていきましょう」と述べました。

これは、私の日本研究にとって大きな指摘であり、教訓でありました。外国人は、外に出てすぐ実行したがるが、日本人は、ゆっくり輪を拡げて仲間を加えていく。外国人から見ると、日本人は、ゆっくりすぎると思ったり、じれったいと感じたりするのですが、結果としては、本当の仲間になることが出来ると思います。

経済自由化時代に入って、外国人は日本の自由化が遅いと批判しました。外交、文化、政治、すべてにいえることで、日本は国際化しなければなりません。その国際化も遅いし、批判もされています。しかし、私の感じとしては、ここ二、三年の間に、日本の国際化の決心は出来あがり、その過程を進んでいると思います。

国際セミナー館は、その一歩であると思います。

昭和53年度共同セミナー委員会が発足

委員長に岡宏子聖心女子大教授
副委員長に野田春彦東大教授と
荒川幾男東経大教授

第一回共同セミナー委員会

7月7日（金）17時半〜20時半／私学会館

本年度は、留任の委員八名、再任の委員七名に加えて、新たに八名の委員を委嘱し、別記のように二三名をもって委員会を構成することとなった。

第一回委員会は新旧委員の歓送迎会を兼ね、一八名の出席の下に開催された（うち旧委員出席者は青木生子日女大教授、野口武徳成城大教授）。議事はまず飯田館長の挨拶と委員の紹介のあと、5月8日に行われた前年度正副委員長会議の結果、岡宏子氏を三度委員長に推薦したい旨の説明がなされ、全員一致で岡氏が選出された。岡委員長は、野田春彦、荒川幾男の両氏を副委員長に指名し、全員の賛成を得て承認された。

次に、館長より交友館と国際セミナー館の二つの落成記念式典と、それらに併せて開催された第98回共同セミナー、国際学生シンポジウムが諸先生のご協力で無事成功裏に終了したこと、二つの建物を加えることによって当ハウスの事業をより充実させていきたいとの報告と抱負がなされた。第98回共同セミナーについては山岸委員が、国際学生シンポジウムについては企画室が実施報告を行った。

続いて、第99回、100回の準備経過報告が、それぞれ担当委員である友部、岡両氏より行われ、早速、今回の主要な議題である本年度下半期の企画についての討議に移った。協議をはさんで会食の席につき、なごやかに談論。旧委員二名には感謝と慰労の拍手が送られた。

毎回、議事が多く時間が足りないのが常であるが、活発な討論によって、三回分の構想と担当委員を決定することができた。

なお、今回の委員会の決議に基づいて企画室で準備を進めた結果、次のように開催の予定である。

――予　告――

▼第一〇一回大学共同セミナー
主題＝映画表現と人間――チャップリンと二〇世紀文明――
期日＝昭和53年11月24〜26日
《ゲスト講演》
映画評論家　淀川長治氏
《セクション演習》
荒井良雄、品田雄吉、白井佳夫、三好弘、宮下啓三の諸氏

▼第一〇二回大学共同セミナー
主題＝市民的自由と政治参加（仮題）
期日＝昭和54年1月12〜14日

【共同セミナー委員】

△委員長▽
岡　宏子　聖心女子大教授

△副委員長▽
野田　春彦　東京大教授
荒川　幾男　東京経済大教授

△委員▽
江沢　洋　学習院大教授
勝見　允行　国際基督教大教授
谷口　汎邦　東京工業大助教授
山岸　健　慶応義塾大教授
池上　秋彦　明治大教授
黒田　道雄　成蹊大教授
佐竹　寛　中央大教授
外山滋比古　お茶の水女大教授
友部　直　共立女子大教授
人見　宏　上智大教授
藤村　瞬一　津田塾大教授
村田　勝彦　早稲田大教授
○板垣　雄三　東京大助教授
○小畠　守生　慶応義塾大教授
○北村　甫　東京外語大教授
○熊坂　敦子　日本女子大教授
○小池　滋　東京都立大助教授
○香原　志勢　立教大教授
○高須　裕三　日本大教授
○西川大二郎　法政大教授
（就任順・50音順、○印は新任）

第6回八大学合同セミナー

――共同セミナーから自主ゼミに成長――

主題――新しい国際秩序を求めて

期日――昭和53年6月23〜25日

昭和48年から三年間にわたって共同セミナーとして開催された八大学合同セミナー（慶応、成蹊、津田塾、聖心女子、一橋、上智、ICUの七大学で発足し、第2回から明治が加わる）は、宇野重昭（成蹊）、細谷千博（一橋）、三輪公忠（上智）、池井優（慶応）の四人の教授が提唱した国際関係の合同ゼミで、毎回、学生の実行委員会が組織され、半年間に十数回に及ぶ勉強会を重ねて進められてきた。

昭和51年には共同セミナーから独立し、当ハウス企画室が若干の援助をするほかは、テーマ設定、企画運営に至るまで自主ゼミ形式で実施してきており、今回で通算6回目を迎えた。

教授陣には、かつての参加者で講師や大学院生となっている先輩の指導も仰ぎ、OB会も出来るなどよき伝統を培っている。

△参加学生▽ 106名（内女子45名）
津田塾大(26)、明大(19)、慶大(17)、一橋大(14)、成蹊大(13)、聖心女子大(7)、上智大(5)、神奈川大(3)、ICU(2)。

◉八大学合同セミナーを終えて

実行委員会委員長
一橋大学4年　福屋人志
同　副委員長
慶応義塾大学4年　岩城治夫
成蹊大学4年　岡本楠雄

八大学合同セミナーは我々の自主運営であり、テーマなども我々が考えるわけであるが、議論の場として、大学セミナー・ハウスが存在することは我々にとって本当にありがたいことである。そこには大学セミナー・ハウス独自の「生活」があり、「人的交流」「文化交流」がある。大学の中では決して得ることのできないもう一つの「世界」がそこにある。

私は今回のセミナー・ハウスでの生活の中で、飯田館長がおっしゃられた「ザ・セミナー・ハウス」ということばが印象に残っている。八大学セミナーはまさに大学セミナー・ハウスの意図するものと合致したものではないだろうか。大学生がそれぞれの意見をいい、生活を共にする中で人間と人間との触れ合い、そして自分の位置を再認識することができる場所、それが大学セミナー・ハウスである。

我々のゼミもこのセミナー・ハウスを利用しているが、ゼミ単位で利用しても十分にその機能を発揮してくれるところがこのセミナー・ハウスである。幸い、私は「三無主義」とはほど遠い、充実した大学生活を送ってこられた。その中でこの八大を通じてのセミナー・ハウスとの出合いは、私の無形の財産として将来に必ず役立ってくれるものと確信している。私を成長させてくれたセミナー・ハウスの生活、ここに感謝の意を表し、さらに多くの学生が、さらに充実した大学セミナー・ハウスの生活を築かれていかれることを希望してやまない。

（文責・岩城）

昭和52年度　大学共同セミナー白書

昭和52年度は表1のように計八回を実施した（前年度七回）。参加者総数は表2—①に見るように七一四名で、各回平均は約九〇名となり、セミナーの構成から考えると余り多すぎずに、かなり適正な規模で運営されたといえるだろう。男女の割合は、私立大学が前年度に引き続いて女子が上回っているが、全体としては五六対四四で、男子が多くなっている（前年度五四対四六）。

参加者の大学数は、前年度より一校少なく六八校となっている。短大が一校から五校に増えているのが興味深い。

参加者数が五〇名を越えた大学は、前年度が早稲田（六六）、東京（五九）の二校であったのに対して、東京（六七）、早稲田（六二）、慶応（五九）、筑波（五六）、津田塾（五四）の五校にのぼっており、これらの大学の参加者は全体の四二%を占めている（前年度三二%）。学生の参加意欲とこれらの大学の特質との関連を探れば面白いデータになるだろう。

表2—③は、参加学生の専門分野を所属学科で見たものであるが、前年度に比して社会科学系の増加が目立つ。第92回と第96回のセミナーによるものである。また、従来、きわめて少なかった自然科学系は、前年度、共同セミナー委員会の理科系の先生方の奮闘で、一八・二%と倍増したが、昭和52年度も第90・94・97回のセミナーにより一四・一%を占めており、一年間を通してみると、総じてバランスのとれた主題・内容が取り上げられたと見ることができよう。

〔表 1〕 大学共同セミナー開催状況

回数	会期	主題	参加人員
第1回 (No. 90)	昭和52年 5月13日 ～15日	日本列島 —その自然と人間—	60名 (24校)
第2回 (No. 91)	5月27日 ～29日	ロビンソン・クルーソーと現代（新入生歓迎セミナー）	83名 (25校)
第3回 (No. 92)	6月24日 ～26日	日本にとって国連とは何か（高野雄一先生退官記念）	113名 (27校)
第4回 (No. 93)	10月7日 ～9日	文学における死一日本人の死生観にふれて—	100名 (27校)
第5回 (No. 94)	11月11日 ～13日	自然科学とキリスト教—西欧における二つの普遍と特殊—	87名 (30校)
第6回 (No. 95)	12月2日 ～4日	理性と想像力—現代哲学の基本課題—	103名 (36校)
第7回 (No. 96)	昭和53年 1月13日 ～15日	現代の社会主義	94名 (29校)
第8回 (No. 97)	1月21日 ～22日	人間はどこまで機械か（その2）—物質・生命・精神—（今村護郎先生追悼）	74名 (21校)

〔表 2〕 大学共同セミナー参加状況

【①大学別参加者数】

＜国立大学＞	(18校)232	(67)
茨城	3	
筑波	56	(20)
群馬	1	(1)
埼玉	3	
千葉	3	
東京	67	(4)
東京医科歯科	6	(1)
東京外国語	23	(8)
東京学芸	9	(6)
東京農工	8	(1)
東京工業	13	
お茶の水女子	19	(19)
電気通信	1	
一橋	5	(3)
横浜国立	5	(1)
静岡	5	(1)
名古屋	1	
京都	4	(2)
＜公立大学＞	(3校)18	(8)
東京都立	8	
横浜市立	5	(4)
都留文科	5	(4)
＜私立大学＞	(47校)437	(220)
跡見学園女子	1	(1)
獨協	9	(2)
青山学院	7	(4)
桜美林	2	
学習院	2	(1)
共立薬科	2	(2)
慶応義塾	59	(9)
国学院	3	(2)
国際基督教	29	(9)
駒澤	2	
実践女子	1	(1)
芝浦工業	2	
上智	14	(10)
白百合女子	1	(1)
杉野女子	2	(2)
成蹊	16	(10)
成城	5	(3)
聖心女子	12	(12)
清泉女子	2	(2)
専修	3	(1)
大正	3	(2)
玉川	2	
中央	22	(2)
津田塾	54	(54)
東京経済	1	
東京女子	32	(32)
東京神学	1	
東京理科	1	
東京洋	7	(3)
日本	3	
日本女子	31	(31)
法政	8	(2)
武蔵	2	
明治学院	9	(4)
明治学	5	
明治薬科	1	(1)
明星	1	(1)
立教	8	(2)
立正	1	
和光	1	
早稲田	62	(9)
相模女子	1	(1)
鶴見	1	(1)
フェリス女学院	1	(1)
同志社女子	2	(2)
立命館	1	
龍谷	2	
＜短期大学＞	(4校)5	(5)
埼玉大学経済短期	1	(1)
青山学院女子短期	1	(1)
大妻女子大学短期	2	(2)
女子栄養短期	1	(1)
その他	22	(13)
計 68 大学	687	(295)
計 4 短大	5	(5)
計 そ の 他	22	(13)
合計	714	(313)

【②学年別・男女別参加者数】

区分	1年	2年	3年	4年	大学院	その他	計	比率(%)
男	45	92	117	84	54	9	401	56.2
女	23	101	100	59	17	13	313	43.8
計	68	193	217	143	71	22	714	100.0
比率(%)	9.5	27.0	30.4	20.0	10.0	3.1	100.0	

【③学科別参加者数】

学科	参加者数		比率(%)	
文学	159	(124)	22.3	47.4
史学	16	(10)	2.2	
哲学	34	(18)	4.8	
教育学・心理学	68	(30)	9.5	
芸術	2	(2)	0.3	
教養	7	(1)	1.0	
その他の人文科学系学科	52	(21)	7.3	
法学・政治学	109	(11)	15.3	36.0
商学・経済学	73	(5)	10.2	
社会学	30	(15)	4.2	
国際関係学	37	(36)	5.2	
その他の社会科学系学科	8	(4)	1.1	
理学	36	(13)	5.0	14.1
工学	36	(0)	5.0	
農学	10	(2)	1.4	
医学・歯学・薬学	19	(6)	2.7	
家政	5	(5)	0.7	0.7
その他	13	(10)	1.8	1.8
合計	714	(313)	100.0	100.0

(注)（　）内は内数で女子。
その他…研究生，聴講生，専修科，大学校，卒業生，中高教員。

昭和52年度　業務白書

年間利用者延べ　四万七、二〇七人
通算延べ　四七万〇、七二五人

本年度の宿泊延人数は、前年度開館以来の記録をつくった四七、六三一人にわずか四二四人及ばなかったが、四七、二〇七人を数えて二年連続四七、〇〇〇人台を、また三年連続四五、〇〇〇人以上を維持することができた。

一方において、開館以来の利用者延人数は本年度末に四七〇、七二五人に達した。新年度の施設拡充、利用者の開拓等を考慮に入れれば、開館十三年目の昭和53年度半ばすぎには五〇万人を突破することになろう。

昭和52年度に更新された記録を拾ってみると、まず年間ゼミ回数の一、〇九六回で、前年度につくられた最多記録（一、〇二六回）を更新し、二年連続一、〇〇〇回を上廻った。月平均は九一回となるが、七月の一一一回は月間ゼミ回数の新記録である。さらに、年度末の三月にゼミ回数が一〇〇回を超えたこと、その結果一〇〇回台が7月、9月、10月、3月と年間四回を数えたことも、これまでにない記録である。

本年度の利用状況を利用者別でみると、表2のとおりである。ゼミ回数によって利用の頻度を示すと、「大学連合」を含め、全体の八二％（前年度八〇％）が大学および学生の利用であり、九％が「学会・教育団体」、同じく九％が「官公庁・経済団体」となる。以上の比率はここ数年ほとんど変化なく持続されており、さらに「学会・教育団体」の学会には教師が研究者として参加しているし、教育団体の主催する諸セミナー、会議には学生も参加しているから、これらを含めると約九〇％の利用者は大学及び大学人であるということである。この事実は、大学共同の広場にふさわしい利用形態が確実に定着したことを物語るものといえよう。

本年度中に五三校となった協力会員校の利用については、ゼミ回数で七二六回（構成比六六％）、宿泊延人数で二二、七二五人（四八％）と、ともに昨年度を上廻る最多記録となった。会員校の中にその基盤を持つ当ハウスとしては、当然のこととはいえ、まことに喜ばしい傾向といえよう。

本年度は東京都立大学が年間利用回数の新記録である六八回で、昨年度の早稲田大学に代って最多利用校となったが、これに東京大学を加えた三大学が、ここ四年間連続して最多利用上位三校となっている。なお、前年度より当ハウスの近隣にキャンパスを移した東京薬科大学や共同セミナーの参加者も多い津田塾大学が、ともに利用回数の多い一〇校のリスト（表3）に初めて登場している。また、宿泊延人数では早稲田大学が二、〇五七人で三年連続最多記録を更新することになった。単一の大学の年間延人数が二、〇〇〇人を上廻ったのも開館以来初めてのことである。

昭和52年度には、一室二人のユニット・ハウス一〇〇棟を主体に二四〇床を収容定員としているので、前記宿泊延人数四七、二〇七人を宿舎の稼動率に換算すると、年間の平均は五五％となって、50年度以来、三年連続五〇％を超す稼動率が持続された。

稼動率が六〇％を上廻った月は5月、8月、9月、3月の各月、また、五〇％を下廻った月は11月、1月の二ヵ月である。特に1月は、各大学の学年末試験の迫る同月後半の利用率が予想以上に低かったため、三〇％を割る結果となった。例年のことであるが、この月の利用者の増加を図ることが今後の課題である。しかしながら、これは統計的数値であって、実際には二〇〇人を超した日が年間三五五日中一〇〇日近くあった。とくに同じ日の午前に二〇〇人が退室し、午後また新たに二〇〇人が入室するというときのベッド・メーキング等は多忙を極める。また、この宿泊延人数は、月平均にすると三、九三四人、一日平均では一三三人となり、年間を通していかに活況を呈しているかを示している。

なお、この一年間学生たちのためにゼミでよく利用された先生方のお名前を記し、その教育への熱意に敬意を表したい（敬称略）。

7回＝志田信男（東薬大）、6回＝城塚登（東大）、虫明功臣（東大）、坪井実（東薬大）、5回＝竹内与之助（東外大）、4回＝亀山三郎（中大）、石崎忠司（中大）、西川大二郎（法大）、神保信一（明学大）、横山定雄（武蔵大）、谷敷正光（駒沢大）、河野恵（東薬大）

最後に、宿泊日数別の統計によると、ゼミ回数では一泊が五四四回（五〇％）、二泊が四〇五回（三七％）、三泊が八七回（八％）で、全体の九五％（前年度と同率）を占め、残りが四泊以上となっている。これを宿泊延人数でみると、二泊が一九、一八六人（四一％）で最も多くなっている。

〔表 1〕　月別利用状況

月	ゼミ回数	宿泊延人数（人）	定員比（％）
4	81	4,208 (4,030)	58
5	99	4,824 (3,926)	65
6	53	3,288 (3,370)	51
7	111	4,257 (5,492)	57
8	86	5,324 (4,653)	72
9	109	4,673 (4,345)	65
10	102	3,990 (4,228)	54
11	85	3,011 (4,415)	42
12	95	3,913 (3,228)	58
1	67	1,698 (2,188)	27
2	99	3,594 (3,766)	53
3	109	4,427 (3,990)	60
計	1,096	47,207(47,631)	55
月平均	91	3,934 (3,969)	55
1日平均	3	133 (136)	

（注）（　）内は前年度数

〔表 2〕　利用者別宿泊人数・ゼミ回数

	ゼミ回数	比率（％）	宿泊延人数（人）	比率（％）	1団体平均実人数
会員校	726 (690)	66	22,725(22,351)	48	21
非会員校	142 (114)	13	6,206(6,618)	13	44
大学連合	31 (20)	3	4,498(2,520)	10	64
学会・教育団体	102 (99)	9	9,117(9,498)	19	43
官公庁・経済団体等	95 (103)	9	4,521(6,385)	10	27
個人	—	—	140(259)	0	—
合計	1,096(1,026)	100	47,207(47,631)	100	26

（　）内は前年度数

〔表 3〕　会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数
1	東京都立大学	68	1	早稲田大学	2,057
2	早稲田大学	63	2	東京大学	1,637
3	東京大学	57	3	東京都立大学	1,610
4	東京学芸大学	38	4	法政大学	1,256
4	中央大学	38	5	中央大学	871
5	法政大学	36	6	立教大学	853
6	慶応義塾大学	29	7	青山学院大学	812
7	青山学院大学	27	8	明治大学	786
7	東京薬科大学	27	9	慶応義塾大学	733
8	明治学院大学	22	10	学習院大学	562
9	立教大学	21			
10	津田塾大学	17			

●事業部だより

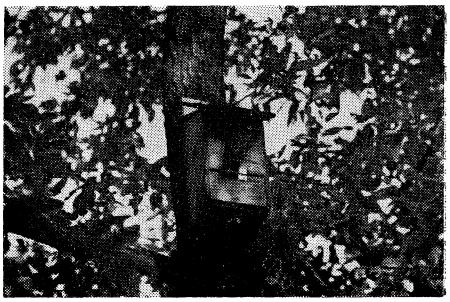
7月から収容定員 二七〇床となる

●今年も春休みを利用した各大学のゼミ合宿の賑わいの中に新年度を迎えた。4月1日の利用者は一二グループで、満員の二二五人であった。そして同月10日すぎには、早くも各大学の新入生オリエンテーション季節の幕明けとなる。その名称も「新入生セミナー」「フレッシュマン・キャンプ」等とさまざまであるが、新入生のための合宿は、7月中旬まで繰り広げられる。文字通り若人に溢れるシーズンである。7月の後半の利用は〝夏休み型〟となり期間も長くなり、年齢も高くなる。学生ゼミの合間に大学英語教育学会（JACET）等夏の常連がこの丘に姿を見せる。5月と6月に落成した交友館と国際セミナー館は早くも〝フル回転〟、特に暑い季節の長期滞在グループにとって交友館サロンは、これまでになかった快適な休憩と懇親の場となり、大好評であった。

この四ヵ月の利用状況を数字で示すと、4月はグループ数八七、宿泊延人数四、〇四六人、5月は八八グループ、四、五八一人、6月は六五グループ、三、二五九人、そして7月が一〇四グループ、五、三五八人となる。7月に相模女子大が協力会員校に加入し、合計五四校となった会員校の占める利用率が、当然のことながら圧倒的である。なお、国際セミナー館の新設により、当ハウスの「収容定員」は7月以降、従来の二四〇床から二七〇床に増加した。

●交友館の落成の日から二ヵ月が経過した。宿舎村の中央に位置する同館は夜11時まで開かれ、コーヒーやビール等の冷たい飲物も供されて、語らいとくつろぎの場所となった。一般の利用者の少ない時は、コンパや学会の懇親会等にも使われて好評である。窓外に大きく広がる空と遠い山々も壮観である。従来の、いわば勉強と宿泊だけだった当ハウスの村の生活環境は、交友館を加えてにわかに豊かになった。利用された飲物の数は6月に一、八四〇、7月は四、三二四にのぼる。常に心せねばならないことは、この交歓の場に自律と節度を失うことになると、この豊かさは逆にセミナー・ハウスの共同生活にとってマイナス要因になりかねない、ということである。交友館が当ハウスの生活の格調を高めるためにも、利用者一人ひとりのご協力をお願いしたい。なお、同館では、利用グループへのオリエンテーション、日に三度のお茶の供給のほか、来客の接遇、館長招待朝食会、お茶の会など多目的に活用されている。

●6月24日に落成した国際セミナー館の〝使い初め〟はその前夜からであった。記録すべき初利用者は、当ハウスの国際プログラム委員長で、この度の落成記念シンポジウムに総合司会として尽力された上智大・川田侃教授と同シンポジウムの提題者となられた諸先生、そして国際プログラム副委員長の成蹊大・広野良吉教授である。まことにまたとない好利用者であった。諸々の備品類や宿舎の鍵の番号札の準備なども、〝すべり込みセーフ〟といったあわただしさであったが、とにかく大事な日を目前にして、無事〝初眠り〟をしていただき、個室では日本茶もお飲みいただけた筈である。記念シンポジウム終了後、今度はご自分のゼミの指導で引続き滞在された上智大・鶴見和子教授は〝初風呂〟の記念ですと、同館のセミナー室に壁時計を寄贈された。


学生手作りの巣箱——宿舎を見つけた小鳥

セミナー室の初使用は落成の日の午後からで、朝日イブニングニュース社の主催する「英語討論セミナー」がテープ・カットの数時間後に入室している。異文化間の論理的意志疎通の訓練の一手段として、国際社会での活躍を志す人たちに関心が高まりつつあるという討論（ディベート）の理論と実際を学ぼうとするセミナーで、米国の大学から派遣された講師、全国二六大学から参加した学生および社会人計七〇名の交流の機会でもあり、これも国際セミナー館の落成を祝うにふさわしい集会であった。

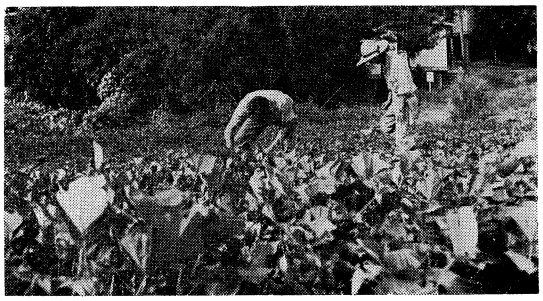
その後も同館の利用はほとんど連日といってよく、この7月には計一九グループ、計七〇七人が宿泊している。これは同館の宿泊定員の七六%にあたる。一方、A（三〇人収容）、B、C、D（いずれも一〇～一五人）の四つのセミナー室もよく活用され、7月中には計四一回の九三〇人。特にA室は月間二四日（稼動率七七%）、六六七人が利用している。同館には、事務室・談話室や自炊室、そして洗濯場などの共有スペースが加えられているので、長期滞在の学会や企業研修会などには特に喜ばれている。なお、同館を教師館に準じて、個人研究等で利用下さることも歓迎している。7月中旬には、来日中のスタンフォード大講師ヤオ・P・スー夫人とその家族が同館に宿泊し、個人利用の第一号となった。

国際セミナーを中心に全館を借り切る大規模かつ本格的な国際会議の申込みも出始めている。本年9月には「国際体育・スポーツ史東京セミナー」が、また一年先のことであるが、日本・カナダ修好五〇周年を記念する「日加会議」も当ハウスで開催される。また、国際セミナー館が目指す〝共同の生活体験を通して人間的交わりを深める小規模な会合〟には、来日する諸外国の留学生を迎えるプログラムが最もふさわしいであろう。困難な仕事であるが、大学内外の留学生関係者の協力を得て、この方も開拓して行かねばならない。

*イモ掘り大会申込受付中
——10月15日を予定——

前号でお知らせしたイモ畑は、この日照りにもめげず、畑一面に青い葉を広げている。この分では大きなイモが地下にごろごろしているだろう。10月初旬が頃合いだというので、10月15日(日)にイモ掘り大会を行うことにした。

題して「大学イモ掘り大会」。千人会のお子さんを特にご招待したいので、**ご希望の方は葉書でもお電話でも結構、早速予約をして下さい。**当日はスコップ、袋（お土産用）持参のこと（申込は事業部北沢・渡辺まで）。


実りの秋も近い芋畑（四群宿舎下）

●館長日記から

炎暑つづきの夏でした。多くの方々からご親切な暑中見舞をいただいたお蔭でしょうか、私も多忙な夏を健在で過ごしました。殊に今年は交友館と国際セミナー館が新しく建ったので、業務の内容も一層複雑になり、職員も工夫をこらしながら暑さにめげず頑張りとおしてくれました。◈よくしたものです。この夏は記録破りの暑さになることを予想したかのように冷房のある交友館が建ったのです。まさに時を得て建ったわけですから利用者の皆さんが本当に喜んでくれました。◈交友館は勉強の合い間にひといき入れに集まる格好の場所となりました。冷房とコーヒーとビールとが周辺の美しい風景に和して、交友館は、すばらしいキャンパスのサロンとなりました。◈ゼミのコンパや学会、研修会のパーティにも大好評です。もっと早くつくるべきでしたとか、いいものができましたねとかいわれます。寄付者の麒麟麦酒さんも大金を寄付された甲斐があったと思って下さるでしょう。◈サロンの接待が館長の日課になり、忙しさを楽しんでいます。できるだけ千人会員の先生方や外国の学者達のお相手をするように心がけています。時にゼミの学生達をコーヒーアワーに招待しています。このようにして外国人とテーブルを共にする事は楽しいです。彼等は絶えず相手に対する思いやりを現わすし、話題がまた豊富です。社交的といってしまえばそれまでですが、自分の言葉で語る内容を身につけていることにもよるのでしょう。◈8月30日、職員丹誠のサツマイモの初掘りをいただいた。茨城はイモの産地。そこで育った私にとって、イモは永遠の好物です。◈9月2日、東京経済大学の渡辺学長達を交友館サロンの朝食に招き、前日から泊り込みで部課長研修会を主宰されている労をねぎらいました。教職員の研修会を開くこと十年になるのが順天堂大学病院であり、新入生オリエンテーションを開くのが東京医科歯科大学とお茶の水女子大学です。その都度学長にお会いできるのはうれしいことです。◈ホテルなどを会場にして職員研修会を開くのは無駄なことです。交友館と国際セミナー館を利用されるよう会員校当局にお勧めします。経費が格段に安いし、本格的な研修の体験ができます。各大学の教授と学生が勉強している姿を見ることができるから、大学再考の機会となります。◈お年を考えて自愛して働けとは色川大吉先生の暑中見舞、七七の喜寿のお祝いには一緒に写真をとりましょうとは青葉学園の吉田美穂子先生が国際セミナー館の落成式から帰られた後でのお手紙の一節。これから9年の人生を、「老いた者には夢を」との聖書に学び、年を考えて夢みる人でありつづけたいものです。◈国際セミナー館側の池にあひるが五羽。営繕主任浅野君の親友らしい。その光景がほほえましい。

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

6月＝三、二五九人
7月＝五、三五八人

■6月

東京都立大学法学部新入生オリエンテーション　桐谷　幸治
中央大学教授　関口　晃
東京都立大学教授　塩崎　進
東京都立大学教授
電気通信大学電信工学科新入生セミナー　藤沢　好一
芝浦工業大学講師　石井　修二
駒沢大学助教授　成田誠之助
早稲田大学教授
東京学芸大学新入生合宿研修　谷敷　正光
駒沢大学講師　西宮　輝明
早稲田大学教授　島田　征夫
早稲田大学助教授＊＊　虫明　功臣
東京大学助教授　永野　賢
東京学芸大学教授
日本大学映画研究会　鳥居　泰彦
慶応義塾大学教授　栃原　敏房
日本大学講師
立教大学教授　安藤　瑞夫
東京都立大学教授　古屋野正伍
東京都立大学教授　桐敷真次郎
一橋大学教授　良知　力
青山学院大学教授　佐藤　信
東京経済大学教授　増田　四郎
中央大学教授　亀山　三郎
中央大学教授　川添　利幸
東京学芸大学教授　大久保典夫
中央大学教授　山田　卓生
東京都立大学教授　奥山　典生
中央大学教授　丸尾　直美
上智大学教授　鶴見　和子
東京都立大学教授　唄　孝一
早稲田大学教授　大槻　健
東京理科大学講師　山口　俊和
東京都立大学助教授　慶谷　壽信
一橋大学講師　浜谷　正晴
東京学芸大学講師　宮崎　義憲
東京都立大学教授　平田　光穂
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション＊
白百合女子大学小百合会　野間　三郎
創価大学教授
日本女子大学附属高等学校
聖ヨゼフ学園高等学校
日本私立医科大学連合
国際学生シンポジウム

予告

◈第一五回大学教員懇談会

—大学共同セミナー一〇〇回記念
大学教員懇談会一五回記念—

主題—今日の大学教育の問題点
期日—昭和53年12月15〜17日
＜講演＞　朝日新聞客員論説委員　永井道雄氏
＜世話人＞
東京大学名誉教授　前田護郎氏
筑波大学教授　井門富二夫氏
成蹊大学教授　宇野重昭氏
聖心女子大学教授　岡　宏子氏
電気通信大学教授　井早康正氏
国際基督教大学教授　原　一雄氏
東洋大学教授　大川信明氏
早稲田大学教授　柏崎利之輔氏
津田塾大学教授　馬場伸也氏
東京女子大学教授　遠藤真二氏
＜参加対象＞大学教員、共同セミナー指導を経験された教授および学外者約八〇名

今日から8月、長く暑い7月でした。お元気でございましょうか。ただいま、先日お送りいただいた「セミナー・ハウス」55号を拝見し、広中平祐先生の〝これからの日本人は〟という講演要旨に強い感銘を受けました。＜人間の脳（コンピュータよりはるかに優れた）の寛容性の活用＞＜方向性が明確でない時期は試行錯誤の上手な人が力を発揮する＞＜inter-disciplinary な見方の重要性＞……これに、もう一つ、〝人間も自然の子〟というのが加わってほしいと思います。長くきびしい夏となりそうですので、くれぐれも御身大切になされてください。

【館長宛の書簡より抜粋】　椚　国男

朝日ウィクリー英語討論セミナー
第6回八大学合同セミナー
東京都立保育園園長会
新東京日産自動車販売
日本能率協会＊
スリーボンド
ブルーベル・インターナショナル
ソフトウェアマネジメント
西武百貨店
伊勢丹
日本化薬
第一建築サービス

【個人利用】
東京ガス不動産　米山　哲夫
一橋大学講師　佐藤　共子
八王子ロータリークラブ交換学生　ジェーン・ラーソン
ジョン・コクラー
ハワイ大学大学院英語研究科　チョン・ドン・スー

東京経済大総務課長　小日向　允
【日帰り利用】
ゆかた会
明治大学児童文化研究会OB会
法政大学教授　平田　喜彦
宝泉
■7月
電気通信大学材料科オリエンテーション
東京都立大学助教授　高田　衛
中央大学教授　呉　天降
学習院大学教授　大川　章哉
東京薬科大学やきものクラブ
法政大学通信教育学生会
成蹊大学教授　広野　良吉
明治学院大学助教授　松島　浄
東京大学教授　木村尚三郎
法政大学教授　湯川　和夫
東京工業大学助教授　野田　淳彦
東京大学教授　斎藤　眞
東京都立大学助教授　桐谷　維
学習院大学教授　小松　茂夫
武蔵大学助教授　一楽　信雄
学習院大学心理学科総合セミナー
駒沢大学教授　寺中　良二
東京大学助教授　菊地　昌典
芝浦工業大学建築学科教室
お茶の水女子大新入生セミナー＊
東京工業大学教授　飯島　泰蔵
慶応義塾大学教授　加藤　寛
東京都立大学教授　東　洋一
中央大学助教授　若松　隆
東京大学助教授＊　見田　宗介
中央大学教授　丸尾　直美
東京大学教授　下総　薫
法政大学教授　金山　行孝
法政大学学友会技術連盟
大妻女子大学英文科英語特殊演習
東京大学教授　渡辺　昭夫
青山学院大学教授　佐藤　和男
東京都立大学助教授　石田　頼房
東京学芸大学助手　木下　浩
早稲田大学教授　清水　望
一橋大学助教授　村井　敏邦
東京外国語大学教授　竹内与之助
慶応義塾大学教授　山岸　健
津田塾大学数学科フレッシュマンキャンプ
武蔵大学教授　私市　保彦
神奈川大学助教授　堀野　定雄
中央大学助教授　三上　照美
青山学院大学教授　日向寺純雄
東京大学教授　和田　英一
慶応義塾大学講師　中込　昌孝
東京都立大学助教授　児玉昭太郎
津田塾大学ESS
明治学院大学教授　増田　茂樹
明治学院大学文連会執行部
青山学院大学助教授　関田　寛雄
杉野女子大学短期大学部教授　田村　晥司
早稲田大学教授　川原　栄峰
職業訓練大学校職業訓練研究センター
高千穂商科大学助教授　名越二荒之助
独協大学教授　林　俊一
横浜市立大学教授　柳下　勇
東京工業高等専門学校教授　金田　数正
京浜女子大学講師　坪井　實
高等専門学校教員研究集会
東電学園大学部
第99回大学共同セミナー
文部省大学局学生課厚生補導事務研修会
立川姉妹都市青年クラブ
経済地理学研究会
第8回フェライト夏季セミナー
大学英語教育学会
日本教会成長研究会
子どもとつくる生活文化研究会
富士見町教会
トミー植松語学センター
新日本医師協会
品川教会
日本基督教団阿佐ヶ谷教会
京王プラザホテル＊＊
スリーボンド
太田製薬
日本電気
岡本フレイターズ
ソフトウェアマネジメント
日本化薬
日野協力会
東京システム技研
組合貿易
【個人利用】
一橋大学講師　佐藤　共子
スタンフォード大学講師＊　ヤオ・P・スー
山梨大学助教授　荒川　恒子
筑波大学職員　針貝　俊彦
国立音楽大学講師　神戸愉樹美
東京音楽大学OG　吉成　悦子
新潟女子短期大講師　平野　絹枝
静岡英和短期大助手　仁田　恵子
富山大学講師　J・B・ブラウン
多摩美術大学学生　水口　久
学習院大学学生　都築　昭義
清水　英之
染谷　忠弘
仙台電波工業高等専門学校教授　山田　竹実
京都大学助教授　豊田　昌倫
名古屋大学助教授　天野　郁夫
国際基督教大学教授　原　一雄
広島大学教授　喜多村和之
東京医科歯科大学助教授　増田　義男
東京ガス不動産　米山　哲夫
【日帰り利用】
野外塾
東京経済大学学長事務室

●編集後記

本号は、国際セミナー館落成記念号として編集した。多くの方々が共に喜び、祝って下さった6月24日は、当ハウスの明日を拓く建物の献堂された記念すべき日であった。この光景を紙面に再現し、永く記憶にとどめておくため、7～10ページを特集記事で組んだ。したがって本紙を16ページに増頁せざるを得なかった。福田総理、園田外相のメッセージ、来賓の祝辞が、この新しい建物の進路を示して下さっている。

また、記念講演と記念シンポジウムの概要を通して、諸先生が描かれた"Japan and the World"の新しいヴィジョンを汲み取っていただけたらと思う。

NHKブックス
《最新刊》

現代青年の意識と行動
吉田　昇他編　高度経済成長とその終焉は、青年の意識にどのような変化を与えたか。各種の大規模調査結果に基づく青年像を提示。●650円〒160

災害情報を考える
柳田邦男　社会構造の急激な変化にも拘らず、日本人の防災意識は旧態依然。"危険な日本列島"の災害情報のあり方を具体的に提示。●600円〒160

地球の回転
時間・位置・速度の話
須川　力　"地球は回転する"――今では当り前の現象の意味は極めて大きい。時間・位置・速度等によって、この古くて新しい課題を探る。●650円〒160

日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41-1